

市民活動を FM ラジオで発信！！ 『つなげよう！市民のチカラ！』

○第8回：2015年12月27日（日）

○ゲスト：チャイルドラインあおもり

弘前分室事務局長

伊丹 秀子さん



チャイルドラインあおもり弘前分室事務局長の伊丹さん（右）

○放送内容

18歳までの子どもがかける専用電話「チャイルドライン」。子どもたちと声でつながる「心の居場所」づくりを目指し、弘前でも5年前から活動を始めています。誰にも言えない悩みを抱えた子どもたちの「心の声を聴く」ボランティア活動についてお話しいただきました。

□ 子どもの「心の居場所」をつくる

30年ほど前、親や学校にも話せない、誰にも話せない子どもたちの思いを電話で聴いて受けとめ、一緒に考えていく「チャイルドライン」がイギリスで始まりました。

日本では18年前、東京・世田谷でイギリスをモデルにスタートし、全国各地に子どもの電話を受けるボランティアのグループが少しずつ増えてきています。

□ 話を「聴く」

チャイルドラインあおもり弘前分室では、「受け手ボランティア」の養成講座を毎年秋に開催し、子どもからの電話を受ける「受け手」を養成する活動にも力を入れています。

「私たちは、人の話を聴こうと思っても意外と聴くのが下手なんです。聴くよりも自分でしゃべってしまうんですよね。」

そこで、子どもたちがなかなか話さない話をきちんと聴きとり、最後までしっかり聴くために養成講座を行っています。子どもたち自身が自分の内にある可能性に気づき一歩踏み出すお手伝いをするため、話を聴くトレーニングや、子どもの権利条約の一番基本的な部分、病気の子どもたちのケースなどを全10回の講座の中で学びます。」

この養成講座は、2016年も9～12月まで行われる予定です。

伊丹さんは、「子どもたちの相談や悩みを聴くためだけでなく、自分の成長のために『傾聴』について学んでみたいという方やロールプレイだけ学んでみたい方など、興味を持ったところだけでもいいので、ぜひ受講していただいて、弘前に傾聴の輪が広がってほしい」とお話しされていました。

□ 感情に寄り添う

学校に行きたくないという悩みでも、一人ひとりその奥にある感情は違います。そのため、学校での出来事などの「事柄」がずっと続く電話でも、事柄に振り回されず、話している子どもの感情に寄り添うように話を聴いていくことを、受け手ボランティアのみなさんは大切にしているそうです。

伊丹さんは「『あなたの辛さを今、しっかり受け止めましたよ』と相手の感情を否定せずに受けとめます。そのことで子どもたちの心が動き始めるんですよ。その動き始めた彼らの心を応援します」と、電話で話を聴くときの基本となる大事なポイントを教えてくださいました。

□ 「聴いてもらって、ありがとう」

電話での相談は、相手の表情や顔色を見て状況を判断することができないため、言葉や声の調子から、その奥にある感情や悩みの本質を読みとる力が大切になります。

「チャイルドラインの基本は、受け手ボランティアから電話を切ることはなく、かけ手の子どもたちが全部話し終わった後、自分から『聴いてもらってありがとう』と言って切ってくれる。これが一番いい、ボランティアの聴き方だと思っています」と伊丹さんはお話しされていました。

チャイルドラインあおもり弘前分室では、今後も子どもたち一人ひとりの声に耳を傾け、子どもたち自身が解決への一歩を踏み出せるよう、子どもたちを応援する活動を展開していきます。